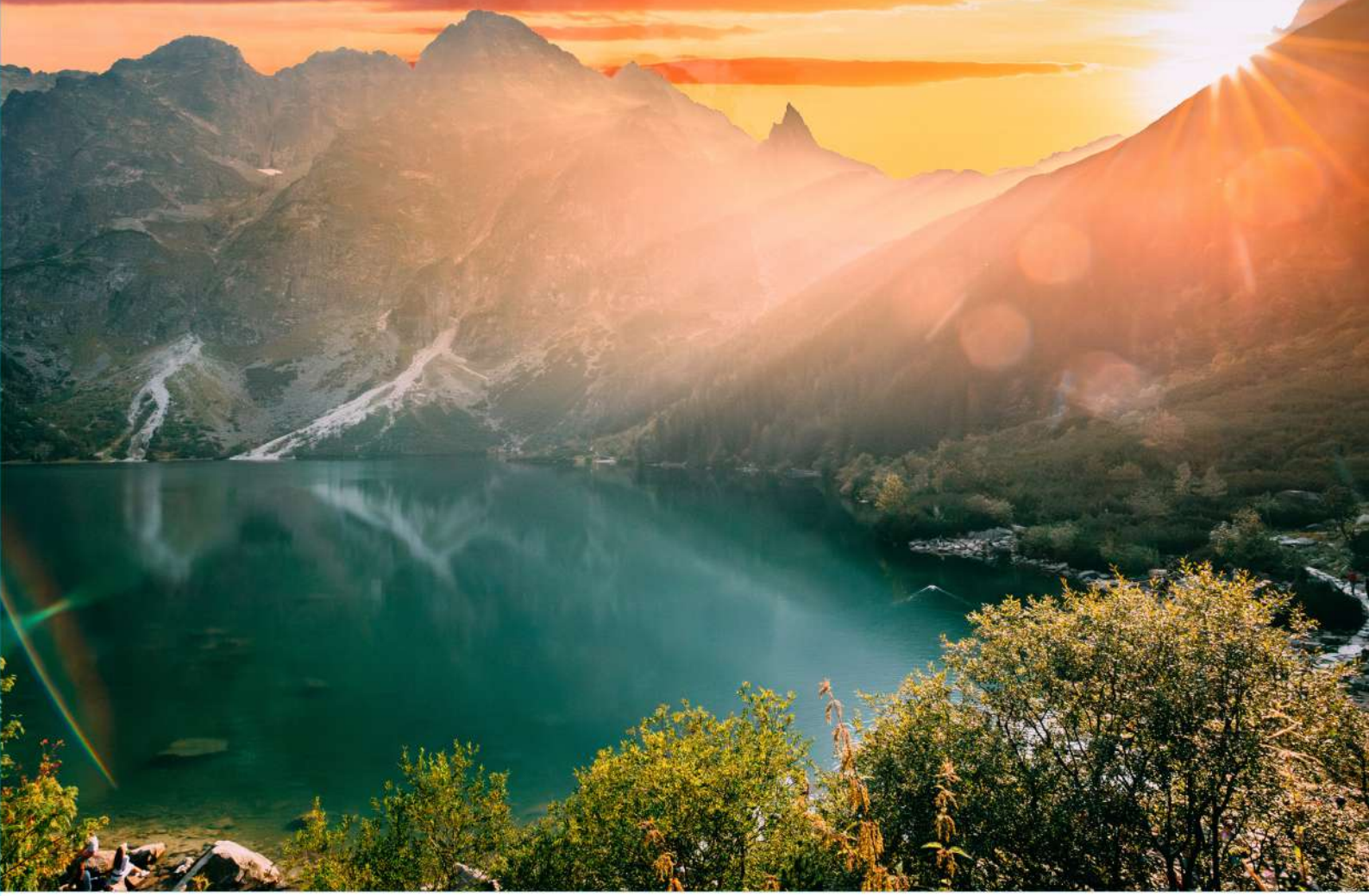
Gaia Philharmonic Choir

第19回 定期演奏会

2024.11.23.Sat

第一生命ホール



主催：Gaia Philharmonic Choir / 耕友会　後援：JCDA 日本合唱指揮者協会 / 東京都合唱連盟 / ICOT 東京国際合唱機構 International Choral Organization of Tokyo

Greeting

てんこ盛りの演奏会に、ようこそ！

私は、そもそも欲張りな性格で、欲しいものはどうしても欲しいし、やりたいことは今すぐにやりたいという困った性格の人間なのですが、今回のGaiaの演奏会の内容も、実に多彩なものとなりました。今わたしとGaiaのメンバーがどうしても演(や)りたい曲のてんこ盛りです。さながら、合唱のお祭りの様相です。その内容を、簡単にご紹介しましょう。

まず、今日は勤労感謝の日、ということで、日本の民謡の中でも『仕事唄』を集めたステージをお送りします。今回演奏する仕事の現場は、海洋、田畑、炭鉱、はたまた鉄道敷設現場と様々です。それぞれの仕事場に、それぞれの歌があった。近代化された現代では聴くことのできなくなった、日本人のソウルをお楽しみください。

次に、森山至貴さんが作曲した組曲『沈黙のありか』を、ピアニスト渡辺研一郎さんをお招きしてお送りします。牟礼慶子さんの、偏向社会への眼差しを、社会学者でもある森山さんが見事に音化しています。渡辺さんのピアノは、確実な分析力の上に立ち、ほとばしるパッションが魅力です。

最後のステージは、ポーランドの若手新進作曲家、Zuzanna Koziejさんの作品をお送りします。私とズザンナとの出会いは、昨年4月のトルコ・イスタンブールでした。彼の地で開催された、世界合唱シンポジウムで、私は作曲のマスタークラスの講師を務めたのですが、とても優秀な生徒の一人がズザンナだったのです。私は、彼女の感性の豊かさに惹かれました。荒削りですが、非常に繊細な感性を持っている人だと思いました。いつか世界に知らしめたい逸材だと思い、演奏のチャンスを伺っていましたが、1年半経ってこうして彼女の作品をご紹介できることを、とても嬉しく思っています。Spirit of Natureは、私たちに原点回帰を促すような、スケールの大きな作品です。2群の混声合唱による、規模の大きな作品ですので、耕友会の合唱団、室内合唱団VOX GAUDIOSAに共演してもらい、この曲をダイナミックに表現したいと思います。

本日世界初演されるのは、Hymn to Gaiaという作品です。光栄にも、我が合唱団の名前を冠してくださいました。

日本の若手作曲家、森山さんと、ポーランドの若手作曲家ズザンナの曲の違いもまた、今日のコンサートの楽しいところとなりましょう。

音楽監督・常任指揮者

松下 耕

本日はGaia Philharmonic Choir 第19回定期演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。皆さまの温かいご支援により本日の演奏会を迎えられたこと、心より感謝申し上げます。

Gaiaの活動理念の一つに「古今東西の名曲に取り組む」という想いがありますが、今回の演奏会は例年以上に多種多彩な作品を取り揃えたプログラムとなりました。特に第3ステージでは、ポーランドの新進気鋭の作曲家であるZuzanna Koziejさんをお迎えいたします。日本で初演となる彼女の作品の世界観を、皆さまと分かち合えることが何よりの喜びです。

本日の演奏会に至るまで、今年のGaiaは団内でのソロ・コンサートの実施、うたフェスJAPANでのドイツ・レクイエム、耕友会コンサートVol.9「千原英喜個展」への出演など、団員一人ひとりが演奏者として表現の幅を広げる機会に富んだ一年でした。その一年の集大成として、第1ステージから第3ステージまで瑞々しい音楽をお届けできればと思います。

最後になりますが、本日共演いただく素晴らしい奏者の先生方、そしていつも私たちを根気強くご指導くださる松下耕先生に深く御礼申し上げます。

短い時間ではありますが、心温まる時間をお過ごしいただければ幸いです。どうぞ最後までお楽しみください。

団長

中村 俊幸

Program

1st Stage

日本の民謡 ～勤労感謝の旋律～

混声合唱のためのコンポジション「日本の民謡 第７集」より　作曲：松下 耕
田植歌

合唱のための「12のインヴェンション」より　作曲：間宮 芳生
米搗まだら

合唱のための「12のインヴェンション」より　作曲：間宮 芳生
稗搗唄

混声合唱のための「五つの日本民謡」より　作曲：三善 晃
ソーラン節

混声合唱のための　作曲：松下 耕
日本の仕事唄

混声合唱のためのコンポジション「日本の民謡 第６集」より　作曲：松下 耕
常磐炭鉱節

2nd Stage

混声合唱組曲「沈黙のありか」　作詩：牟礼 慶子　作曲：森山 至貴

1．見えない季節
2．不在の論理
3．挑戦状
4．沈黙のありか

3rd Stage

Spirit of Nature　作曲：Zuzanna Koziej

Ⅰ. Birth of Nature
Ⅱ. Roots
Ⅲ. Paths
Ⅳ. Forces of Nature

Hymn to Gaia　**委嘱初演**　作曲：Zuzanna Koziej

1st Stage

日本の民謡
～勤労感謝の旋律～

混声合唱のためのコンポジション「日本の民謡 第7集」より

田植歌

鳥取県民謡　作曲：松下 耕

千石まいた種をば
朝のうちに取り上げ

大山やまの鳥の子
鳴いてよたかに取られた

どんどらどんとなるのは
前の小川の瀬の音

大山やまの桜は
色は八色に咲き分け

傘の上から日が照りて
暑さこらえて風を待つ

大山やまで光るは
月か星か蛍か

作曲者の松下耕氏は「日本の民俗音楽の合唱曲への投影」をライフワークの一つと位置付け、多くの合唱作品を世に送り出している。この曲は、鳥取県民謡を3つ集めた曲集の2曲目の作品である。稲作農業が盛んな日本には、たくさんの田植歌が存在する。その中で作曲者が美しさに惹かれた旋律が使われている。歌詞に出てくる「大山」は「だいせん」と読み、昔から「神が住む聖なる山」として崇められていた。季節の移ろいが色鮮やかに表現され、ポリフォニー主体で作曲された美しい旋律の絡まり合いが魅力的な作品である。

合唱のための「12のインヴェンション」より

米搗まだら

長崎県民謡　作曲：間宮 芳生

アラ、チョッコン、カッタン
ゆうて　ない米どま搗こいど。
船の船頭さんの、出船米ヨー。
　　コラ、ハイコメ、ハイコメ、ハイコメ、ソコヤレー。

アラー、コラ、船どまひっかけ、
船、船頭さんが　めんちょ。
のせた女子は、びんた禿ヨー。
　　コラ、チョコチョコ、
　　チョッコン、チョッコン、チョッコン、
　　ハイコメ、ハイコメ、ハイコメ、ソコヤレー。

アラー、コラ、わたしが、さまじょさんな、
どっから見てでも、判る。
すぼで頭結うて、洟たれてヨー。

すぼで、頭結うて、洟たれては　おらぬ。
こまい　小男の　桜色ヨー。

日本民謡を素材にした合唱音楽を生み出した第一人者である間宮芳生氏の1969年の作品で、長崎県諫早市の民謡である。臼の周りに数人が輪になって、玄米をついて白米にする作業の際に歌われた。いわゆる労作唄のなかで、テンポがこれだけ速い民謡は珍しい。この作品は、2拍子の中に5拍ごとのアクセントが付いているのも特徴的である。

合唱のための「12のインヴェンション」より

稗搗唄

宮崎県民謡　作曲：間宮 芳生

鈴の鳴る時ゃ　何とゆうて出ましょ　ヨーホーホイ
馬に水くりょと　ゆうて出ましょヨー

おどま平家の　公達　ながれ　ヨーホーホイ
おどま追討の　那須の末ヨー

稗の五升どま　唄でも搗くが　ヨーホーホイ
三斗五升から　杵で搗くヨー

　　アラ　臼よし　杵よし
　　相手はなおよし　搗いてコリャセト

宮崎県東臼杵郡椎葉村で伝承されてきた民謡で、曲集の1曲目に収められている。稗を臼に入れて杵で搗く際に歌われていた労働歌で、有名な「庭の山椒の木～」の一節はこの曲にはない。椎葉村は九州山地の中央に位置する山村で、山肌に焼き畑をつくり、稗、粟などを植えて常食してきた。
朗々と歌うテナーソロが合唱を先導し、終盤は男声合唱による素朴で力強い旋律と掛け声で曲を締めくくる。

混声合唱のための「五つの日本民謡」より

ソーラン節

北海道民謡　作曲：三善 晃

エー　ヤーレン　ソーラン
ソーラン　ソーラン　ソーラン（ハイハイ）

〽大島小島は兄弟島よ
　なぜにごみ島（よ）離れ島チョイ
ヤサエ　エンヤーサー　ドッコイショ
ア　ドッコイショ　ドッコイショ

〽離れ島でも時節が来れば
　春は鷗が群とまるチョイ

〽大漁手拭きりりと締めて
　一夜千両の網おこすチョイ

この曲は1973年に東京混声合唱団のために書かれた作品である。ソーラン節は北海道の日本海沿岸の民謡であり、ニシン漁の歌として有名である。日本の仕事唄の中に出てくる「鰊場作業唄」の一節である「沖揚げ音頭」が分化して独自に変化し、「ソーランソーラン」の囃子言葉にちなんで「ソーラン節」と呼ばれるようになった。冒頭は男声合唱のみで勇壮に、途中から女声が加わり混声6部合唱による力強い漁師の歌声が響き渡る。

混声合唱のための

日本の仕事唄

作曲：松下 耕

鰊場作業唄―舟漕ぎの唄

オーシコー　オーシコー
イヤーエー　オーシコー
イヤサーエー　オーシコー
オーコイーヨー　オーシコー

ホーラー　ホーラーヨイサーエー
エンヤレ　ホーラーオーシコー
オーコイーヨー　オーシコー

鰊場作業唄―網起こしの唄

ヤーセイ　ヤーセイ
ヤーセイ　ヤーセイ
ヤサコイ　ヤーセイ
ヤーセイ　ヤーセイ

エーンヤサ　エーンヤサ
コーラヤサ　コーラヤサ
エーンヤサ　エーンヤサ
コーラヤサ　コーラヤサ

ヤーンサノ　ドッコーイ

鰊場作業唄―子はたき音頭

咲いた桜に　なぜ駒繋ぐ
ハァ　イヤサカサッサ

駒が勇めば　ノォ　花が散る
アリャ　花が散る
勇めば　ノォ　花が散る

恋の九つ　情けの七つ
あわせ十六　投げ島田

熊ひき唄

苗場山頂で　熊とったぞ

引けや押せやの　大力で

この坂登れば　ただ下る

西と東の　大関だ

爺さまも婆さまも　出て見られ

線路搗固め音頭

コラシャント　コラシャント
ホイシャント　コラシャント

ホイお次は　コラお次は
ホイ出るぞ　コラ出るぞ

ホイシャント　コラシャント
コラシャント　コラシャント

ホイ朝から　ホイ朝から
ホイ晩まで　ホイ晩まで
ホイ搗くの　コラ搗くの

ホイあの娘の　コラあの娘の
ホイためだぞ　コラためだぞ

ホイシャント　コラシャント
コラシャント　コラシャント

ホイ励めば　コラ励めば
ホイまんまも　コラまんまも
ホイうまいぞ　コララまいぞ

ホイ線路は　ホイおいらの
ホイまもりだ　コラまもりだ

ホイシャント　コラシャント
ホイシャント　コラシャント

鰊場作業唄、熊ひき唄、線路搗固め音頭の３つの仕事唄からなる。鰊場作業唄は漁の流れに沿って唄が構成されており、冒頭の「舟漕ぎの唄」は、漁師たちが舟漕ぎの調子を整えるため、船頭の独唱に続いて漕ぎ手全員が斉唱で答える形式を取る。その後、網にかかったニシンを引き揚げる際に歌われた「網起こしの唄」、網に付いた大量の魚卵をふるい落とす際に歌われた「子はたき音頭」と続く。
長野県民謡の熊ひき唄は、新潟との県境に近い秋山郷で、命がけの熊取りの後、獲物を捕まえた喜びのなかで唄った祝い唄。最後の「線路搗固め音頭」は二人ずつ向き合い、ツルハシで線路の石を搗き固める際に歌われた東北民謡で、手拍子、足踏みも加わり華やかに演奏される。

混声合唱のためのコンポジション「日本の民謡 第6集」より

常磐炭鉱節

茨城県民謡　作曲：松下 耕

ハアー　朝も早よからヨー　カンテラさげてナイ
（ハヤロヤッタナイ）
坑内回りもヨー　ドント主のためナイ
（ハヤロヤッタナイ）

ハアー　お前選鉱場にヨー　おいらは切端ナイ
（ハヤロヤッタナイ）
思い通わすヨー　ドントトロ車ナイ
（ハヤロヤッタナイ）

ハアー　ハッパかければヨー　切端が開くナイ
（ハヤロヤッタナイ）
開く切端がヨー　ドント金となる
（ハヤロヤッタナイ）

ハアー　遠く離れてヨー　会いたいときはナイ
（ハヤロヤッタナイ）
月が鏡にヨー　ドントなればよい
（ハヤロヤッタナイ）
ハアー　会えばさほどにヨー　話もないがナイ
（ハヤロヤッタナイ）
会わなきゃその日がヨー　ドント過ごされぬ
（ハヤロヤッタナイ）
ハアー　おらが炭鉱にヨー　一度はござれナイ
（ハヤロヤッタナイ）
義理と人情のヨー　ドント花が咲く
（ハヤロヤッタナイ）

19世紀後半に発掘された、福島県南部から、茨城県北部の常陸地域にまたがる大きな炭田、常磐炭鉱で働く男たちの唄である。危険の伴う不安な生活の中で、それをはねのけるように明るく歌われる。
篠笛、和太鼓、当たり鉦の和楽器を入れて、楽器の音色やリズムも楽しめるように作曲されている。
このステージの最後に、賑やかな仕事唄をお楽しみいただきたい。

2nd Stage

混声合唱組曲「沈黙のありか」 作詩：牟礼 慶子　作曲：森山 至貴

見えない季節

できるなら
日々のくらさを　土の中のくらさに
似せてはいけないでしょうか
地上は今
ひどく形而上学的な季節
花も紅葉もぬぎすてた
風景の枯淡をよしとする思想もありますが

ともあれ くらい土の中では
やがて来る華麗な祝祭のために
数かぎりないものたちが生きているのです
その上人間の知恵は
触れればくずれるチューリップの青い芽を
まだ見えないうちにさえ
春だとも未来だともよぶことができるのです

牟礼慶子は、1929年東京に生まれ、小中学校の国語教師を務めながら詩や評論など多くの著作を残した。
彼女は国語の教科書にも採用された代表作「見えないだけ」において「確かに在る喜びがまだ見えないだけ」と記している。
冒頭、陰鬱とした独白に始まり、虚無感や停滞感の中に隠された色鮮やかで豊穣なものへの期待感がハーモニーの移ろいによって描かれている。
苦悶の底にあっても、目に見えない喜びはきっとある。ある種の祈りのような心持ちを、Des-Durによる爆発的なフォルテと、無伴奏による確信的なエピローグによって表現している。

不在の論理

互いに抱きあっている
昼と夜の
図式めいた風景のなかを
かわいた運河と
眠れない太陽が通って行く
その後をつけようとして　私は
劇がはじまるなとおもう　私の劇が
はじまるときはいつも静かだ
誰も先を急ぐので
私はゆっくりと行く
世界に先まわりして走り続けたあげく
私の存在がすりへってしまうなど
私には似つかないことだ
私の今日がまだ

あちこちの町角で長い影をひきとめているのに
世界はいらいらと夜をいそぎ
次の一日の用意をはじめるのだ
互いに抱き合っている
私と私の影から
私だけが剝がれて行き
私は疎外された分だけ自由な身の上になる
かわいた運河は　みたされない
欲望に似ているし
眠れない太陽を　みっともない
私の自尊心に似せてもいい
私は私の不在を証明するために
私の存在をなにものかにすりかえねばならないのだ

「不在」とは「最初からその場にいないこと」である。詩人にとって社会とは、「自身の所属する枠組みではなく、常に自分と対等に向き合う存在」であったのだろうか。
16分音符主体のピアノが焦燥感を演出するが、中盤では8分音符主体となり自己の内面に向き合うように落ち着きを取り戻す。
しかし、熱を帯びた詩人の言葉は臆することなく世界そのものを振り切り、独白とともに絶える。

挑戦状

私をそっとしておいてくれないか
あなただって
ひとりにかえりたいことがあるだろう
いてもいなくても同じなら
ずっと後を向かせてくれないか
薄情なくらやみの方が
おしゃべりのまっ昼間より
ずっとましなのだ
だまっていることの
日なたのにおいのようななつかしさを
あなたのひっきりなしに動いている
みだらな口もとへ押しつけてやる
私に明るい方を見させ
歩かせ話させ
笑わせ食べさせ
制服まで作ってくれようという
やさしいおせっかい
でも私は見てしまったのだ
笑みこぼれる頬とはうらはらな
私を見はっている意地悪な小さな仮面を
あなたの優越感をみたすために
歩くなど笑うなどもうごめんだ
私に心からの親切を伝えたいなら
どうかそっとしておいてくれないか
ほんとうの夜明け
ほんとうのしあわせを見きわめる眼を
頼むから曇らせないでくれないか

「沈黙」のアンチテーゼとなる「饒舌」への嫌悪、そして偽善の拒絶をテーマとした、組曲の軸となる楽曲である。
楔のように打ち込まれるピアノとともに「饒舌」への挑戦状が差し出される。
中間部では暖かみのある響きに包まれるが、それすらも偽善に対する皮肉であり、溜め込まれた怒りはワルツとともに叩きつけられる。
終盤、静かな嘆願が提示されるが怒りは収まらず、力強い拒絶の言葉で締めくくられる。

沈黙のありか

私にはもう
楡の木に生れることができない
風の声や露のしたたりや
ゆったり巡る太陽の温もりを
ひとつぶの小さな種子に包みこんで
暗い景色の中で目をさます楡の木

私にはもう
あの沈黙を受けとめる力がない
次の春またその次の夏
正しく季節を育ててゆく
遙かな高さを見きわめる手だてがない
楡の木の知恵を私のものにはできない

私もまた
彼の日の闇から
小さな命を享けたのに
土に抱かれて
やっと生きて来たのを
思い出そうともせず
信じようともせずに

直立する
一本の幹を支えるには
根と根を結びつける
見えない手が
いったいどれだけ必要かを
知りもせず
数えもせずに

ことばと並びながら
それを超えて
いと深いところから
ことばを促している
沈黙のありかを
問うこともなく
確かめることもなしに

私の腕ではなく
楡の木の腕が緑を掲げている
私の声ではなく
楡の木の声が梢を揺すっている
いま　私は黙っている
楡の木の声ではなく
私の声で歌いはじめるため

静かにことばをたくわえ
心地よげに天の近くでそよいでいる
楡の木　沈黙のありかよ

『牟礼慶子詩集(現代詩文庫128)』思潮社

冒頭、穏やかなピアノに背中を押されるように、世界から疎外された心境を語りだす。言葉の裏にある感情の起伏が転調や速度変化によって繊細に描き出されていく。
中間部では、沈黙とはなにか、大きな問いを投げかける。組曲内でも長い無伴奏セクションであるが、この問いをきっかけに「私」と「世界」が和解し自身のあるべき場所へ還っていく。
作中に出てくるニレは、北欧神話において人類最初の男女が生まれた樹とされている。
多くの「饒舌」が蔓延る現代において、あえて「沈黙」に耳を傾け、私たちの本当の拠り所を訪ね求めてはどうか。詩人の声にならない声が聞こえてくるようである。

3rd Stage

Spirit of Nature

Zuzanna Koziej

ポーランドの作曲家・編曲家。ポーランド・ワルシャワのフレデリック・ショパン音楽大学を卒業後、イタリア・トリノのジュゼッペ・ヴェルディ国立音楽院で研鑽を積む。E. エシェンヴァルズ、B. チルコット、P. ウカシェフスキ、そして松下耕といった作曲家たちから指導を受ける機会を得る。2021年に文化・国家遺産省より「ヤング・ポーランド・プログラム」奨学金を授与される。
国際作曲コンクールで数々の賞を受賞。2023年には、アメリカのフェニックス・ボーイズ・クワイアが主催する「ニュー・ワークス・ライジング」合唱作曲コンクールで第3位を獲得し、他の2つのコンクールでも名誉賞を受賞した。
作品はアメリカ、ドイツ、イギリス、エクアドル、リトアニア、ラトビア、エストニア、イタリア、セルビア、ウクライナ、トルコ、オランダ、ハンガリーなど世界各国で演奏されており、多くは国際交流プロジェクトの一環として上演されている。
彼女自身も「Zaufanie-Vertrauen—音楽を通じたポーランド人とドイツ人の交流」というプロジェクトを主催し、ドイツとポーランドでコンサートを開催。両国の合唱団が共に彼女の作品「Mass of Trust」を演奏した。
聴衆と演奏者の双方に新たな発見をもたらし、学びと結束を促す音楽に深く情熱を注いでいる。
ウェブサイト: https://www.zuzannakoziej.com

Birth of Nature

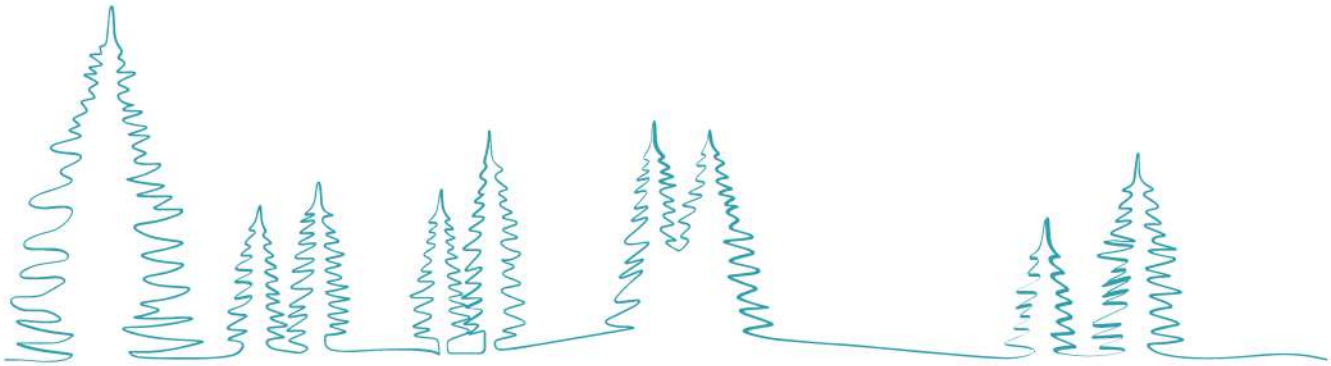
(sleepless night.)	(眠れない夜)
(shining stars.)	(輝く星)
meH_1ns	月
sH_2un	太陽
H_2ster	星
nok^wts	夜
$g^wiH_3wo\ teH_2\ H_2el$	生命が育まれる
$meH_1ns\ kelH_1\ nos$	月が私たちを呼ぶ
$H_2enH_1\ H_2weH_1nto\ per\ d^hĝ^hemon$	風が大地を吹き抜ける
$nb^hrōs\ g^wem$	雨雲が訪れる
$H_2ēwis\ g^hed^h$	鳥たちが群れを成す

「Spirit of Nature」は、人類の進化と自然の力の強い結びつきを描いた作品です。
第1楽章「Birth of Nature—自然の誕生—」では、自然の神秘が徐々に目覚めていきます。森の音と共に聞こえてくるのは、約6000年前の遠い時代に話されていたとされる言葉。多くの言語の祖先と考えられているインド・ヨーロッパ祖語による旋律です。

"Spirit of Nature" tells the story of humanity's evolution and its deep connection with the forces of nature. The piece begins with "The Birth of Nature" (1st movement), where the mysterious elements of nature gradually awaken. We hear the sounds of a forest, accompanied by singing in Proto-Indo-European—a reconstructed language believed to be the common ancestor of many European languages, spoken around 6,000 years ago.

Roots

Pete kora pote,
Vide ma to kore
heyna mara sana hey namo
heyna mara sana hey namo
hym tum
hey nama heyna he hey namma
tolau payi to lau sü
hendo marati hendo ma
haulti rünna
haulti rünna
hey na na hey hey la
kentore lauta mari
kentore lauta mari
houm tum
Ennome la pode claulam ferande
alo lomare uvarila
pouro tauni
ennome la pode claulam ferande
kenntore lauta pa laauna mentü
lau mentüse
turrvouthe glauveira
turrvouthe glauveira
se mentüla fareuto rapareivi
kenntoreula na lau narila
hendomare hendo ma
se guendo tuile
se turrvouthe guendo tuile
se mentüla fareuto rapareivi
kenntoreula namevira henendo lau narila
hendo hendo ma hendomare
heyna mara sana heynammo
heji



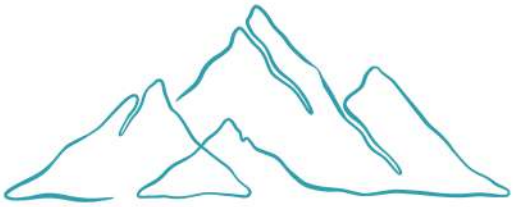
第2楽章「Roots—根源—」では、実在しない人工言語を取り入れ、雨乞いの祈り、活気溢れる踊り、そして歌声が、世界中のさまざまな文化を融合させながら表現されます。

"The Roots" (2nd movement) introduces an artificial language in a vibrant dance, song, or prayer for rain, blending cultural influences from various traditions.

Paths

Lyrics – Polish

Szumi las	森がざわめく
Potężny starej kniei chór	古き森の力強い合唱
Zieleń drzewa, miękkość wrzosu, zapach róż	木々の緑、柔らかなヒースの感触、バラの香り
O szumiący lesie, tęsknię ku tobie, ku twoim pieśniom, O szumiący lesie. Wieje wiatr.	ああ、ざわめく森よ、私はお前を恋しく思う、 お前の歌を求めて。 ざわめく森よ。風が吹く。
A rzeka szemrze, płynie w mrokach coraz dalej A wody coraz bystrzej, coraz dalej płyną wody płyną coraz bystrzej Majestatyczne, opieśnione wody! Skalne olbrzymy strzegą waszej toni Płyń, płyń	川はささやき、 闇の中へと遠く流れゆく。 水はますます速く、 さらに遠くへと流れる。 荘厳でゆったりとした水よ！ 岩の巨人がその深みを守っている。 水は流れていく。
W mgłę spowite góry Niebo pełne czarnych chmur Szary mrok nadchodzi burza W górze tam, gdzie najwyższe szczyty lśnią pogodne błękity	霧に包まれた山々 空には黒い雲が広がっている 灰色の闇が迫り、嵐が来る 上を見上げると、最高峰の山頂が穏やかに輝く 青空の中にある
Look! It's the dawning sun	見よ！夜明けの太陽だ



Lyrics - German

Es leuchten Wald und Heide	森と草原が輝いている
Die Nachtigall di ganze Nacht gesungen, da sind von ihren süßen Schall Da sind in Hall und Widerhall	夜鳴き鶯が一晩中歌っていた、 その甘美な音が響き渡り、 その響きはこだまと共鳴する。
Die Rosen sind aufgesprungen Im Winde wehn die Lindenzweige	バラが咲き誇り 風に菩提樹の枝が揺れている
Du rinnst die melodische Zeit. Zu fahren, zu tragen, und nun ist sie der Strom	お前は旋律のような時を流れる 進み、運ばれ、そして今それは川となった
Wie Traume liegen die Inseln, im Nebel auf dem Meer. Nebel hat dem Wald verschlungen. Nebel, Dammrung bricht herein.	夢のように島々が霧の中、海に横たわる 霧が森を飲み込んだ 霧、そして夕暮れが迫り来る
Blitz und Donner Wilde Stürme Es blitz und donnert, Sturmt und kracht Blitz und Donner sind vorüber, euch erquickt ein Regenbogen	稲妻と雷鳴 激しい嵐 稲妻が光り、雷が鳴り、 嵐が吹き荒れる 稲妻と雷は過ぎ去り、 虹があなたたちを潤す
Look! It's the dawning sun	見よ！夜明けの太陽だ

第3楽章「Paths ―道―」では、ポーランド語とドイツ語のテキストが織り交ぜられ、森の葉を揺らす風、夜の鳥の歌声、水の流れ、霧、山の嵐、そして嵐の後に現れる虹など、自然現象を巡る旅路が描かれます。そのすべての現象が、自然の中を歩む私たちを導いてくれます。そして、昇る太陽に驚嘆する、その一体感を表す瞬間で締めくくられます。

In "The Paths" (3rd movement), Polish and German texts are interwoven in a collage of poetry, guiding us through natural phenomena: the wind rustling through forest leaves, the song of the nightingale, the flow of rivers and streams, mist, a thunderstorm in the mountains, and finally, the rainbow that emerges after the storm. This part concludes with a symbolic moment of unity, as we stand in awe of the rising sun.

Forces of Nature

Oh Sun, majestic one, oh light
Shine on, oh glorious sun
And show thy light
Shine on, above the skies
Never fail to cheer my life

おお、太陽よ、荘厳なるものよ！おお、光よ！
輝け、栄光に満ちた太陽よ
その光を示せ天を越えて、輝き続けよ
私の生をいつも照らし続けてくれ

Great is the sun, and wide he goes
Through empty heaven without repose;

偉大なる太陽よ、その旅路は広大で
休むことなく虚空の天を渡り行く

I am the Earth,
Thy mother, whose stony veins,
To the last fibre of the loftiest tree
Whose thin leaves trembled in the frozen air,

私は大地、その母たる者
石の脈を抱く母であり
最も高き木の最後の繊維に至るまで
凍てついた空気に震える薄き葉よ

Joy, like a cloud of glory,
arise, a spirit of keen joy

喜びは栄光の雲のごとく立ち上り
鋭く澄んだ喜びの精霊となる

Listen! And though your echoes must be mute,
Gray mountains, and old woods,
And haunted springs,
Prophetic caves, and isle-surrounding streams,
Rejoice.

聞け！ 反響が静かに消えゆこうとも
灰色の山々、古き森、幽玄の泉たちよ
予言の洞窟、島を囲む流れよ
歓喜せよ

O flames that glowed!
O hearts that yearned!

燃え盛った炎たちよ！
切望に燃えた心たちよ！

この旅は、太陽、そして自然の根源的な力への賛歌である第4楽章「Forces of Nature」でクライマックスを迎えます。普遍的な言語である英語で歌われるこの曲は、私たちが皆自然から生まれ繋がっている存在であり、自然界への呼びかけが今も私たち一人ひとりの中に響いていることを思い出させてくれます。

The journey culminates in "Forces of Nature" (4th movement), a hymn to the sun and the elemental forces of nature, sung in English as a universal language. It reminds us that we are all interconnected, born from nature, with a call to the natural world that still resonates within each of us.

Zuzanna Koziej

Hymn to Gaia

作曲：Zuzanna Koziej

I will sing of well-founded Earth, mother of all,
eldest of all beings.
She feeds all creatures that are in the world.
All things that go upon the divine earth are
nourished by you,
All that fly through the air and swim in the sea
proceed from your wealth.

From you come blessed children and fruitful
harvests, O potent one.
Life and death are in your power for mortal men.
Happy is the one whom you honor with favor:
to him all good things come in abundance.

His fruitful land is laden with corn, his pastures
are covered with cattle, and his house is filled
with good things.
Such men rule orderly in their cities of fair
women,
great prosperity and riches follow them:
their sons exult with ever-fresh delight,
and their daughters in flower-laden bands play
and skip merrily over the soft flowers of the
field,
those whom you honor, O venerable goddess,
bountiful spirit.
Hail, Mother of the gods, wife of starry Heaven!
Freely bestow upon me for this my song
substance that cheers the heart!
And now I will remember you and another song
also.

私は歌おう　万物の母である大地を
すべてのものの中で最も古く　揺るぎない大地を
大地は世界のあらゆる生き物を養う
神なる大地を歩むものすべてを育むのはあなた
空を飛ぶものも　海を泳ぐものも
みなあなたの豊かさから生まれ出る存在なのだ

めぐみ深い子どもたちと豊かな実りをもたらすのも
力強い女神よ　あなたの恵み
人の命を与えることも　取り去ることも
あなたの意のままに
あなたが慈しみ深く選んだ者は幸せであり
その人にはすべての恵みが豊かに与えられる

その人の畑では作物が豊かに実り
その人の牧場は牛たちで覆われ
家の中は良いもので満ちあふれる
そんな人々は　美しい女性たちの住む街で
正しい法の下に治め　大きな幸せと富が伴う
彼らの息子らは新鮮な喜びに沸き
むすめたちは花々に彩られた輪となって
心楽しく戯れ　野に咲く柔らかな花々の上を踊り跳ねる
崇高な女神よ、惜しみない贈り物をくださる神よ
讃えよう、神々の母よ　星をちりばめた天（ウラノス）の妻よ！
この私の歌への返礼として心躍る生命の糧を与えてください。
そして私は、あなたのこともそしてまた新しい歌のことも心に留めておきましょう。

Translation by International Choral Organization of Tokyo

「Hymn to Gaia」は、ギリシャ神話の大地の女神ガイアに捧げられた、6声の混声合唱による壮麗な賛美歌です。喜びに溢れ、思慮深く、神秘的で、途方もない力を持つ自然に対する畏敬の念と賛辞が込められています。自然のおかげで私たちは生きています。今、私たちはこれまで以上に自然を大切にしなければなりません。この曲とともに、万物の母である地球を讃えましょう。
この曲を、Gaia Philharmonic ChoirとVOX GAUDIOSAに感謝を込めて、そして今日の演奏会を祝うために捧げます。

"Hymn to Gaia" is a piece dedicated to the Greek goddess Gaia, Mother of Nature, Mother of Earth. A hymn-like piece for six mixed voices, majestic and solemn in character. Joyful, yet reflective, it pays respect to Nature, a mysterious and tremendous force. We honour her, we pay her tribute. Thanks to her, we live. Now, more than ever, we must care for her. Let us sing together in praise of our Earth, the Mother of All. The composer dedicated this piece to the Gaia Philharmonic Choir and VOX GAUDIOSA as a gesture of gratitude, and to further celebrate today's concert.

Zuzanna Koziej

Profile

音楽監督・常任指揮者
松下 耕

1962年東京生まれ。作曲家、合唱指揮者。国立音楽大学作曲学科主席卒業。卒業後、ハンガリーに渡り、合唱指揮法及び作曲法を学ぶ。
レメーニ・ヤーノシュ、モハイ・ミクローシュ他に師事。作曲家として生み出している作品は、合唱曲を中心として多岐にわたり、それらの作品は世界各国で広く演奏されており、同じく楽譜も、国内外で出版が相次いでいる。これまでに、国内およびポーランド、中国、台湾、香港において個展が開催された。2005年、合唱音楽における国際的かつ優れた活動が認められ、「ロバート・エドラー合唱音楽賞」をアジア人で初めて受賞した。2019年国際コダーイ協会のシンポジウムで基調講演を行った。また、2023年に同協会より選出され、名誉賛同者(Distinguished Patron)に就任。2023年、ポーランド宗教音楽研究所より、最優秀宗教音楽家として認定され、ワルシャワにて表彰された。第91回(2024年度)NHK全国学校音楽コンクール高等学校の部課題曲「明日のノート」を作曲。通算6曲目。一般社団法人東京国際合唱機構代表理事。

ピアノ　渡辺 研一郎

1990年生。ピアノ、クラヴィコード、中世・ルネサンス期の教会音楽の演奏法などを学ぶ。早稲田大学政治経済学部卒業。東京藝術大学院修士課程音楽学専攻修了。グレゴリオ聖歌の初期の記譜法「譜線無しネウマ」の研究を行う。近年はソレム修道院（フランス）に滞在し、グレゴリオ聖歌による日々のミサ・聖務日課に出席。
ピアニストとして、あい混声合唱団や早稲田大学グリークラブ等と共演、初演作品に携わる。2023年「第72回 東西四大学合唱演奏会」合同ステージ客演ピアニスト。歌い手としては、ヴォーカル・アンサンブル カペラ、サリクス・カンマーコア、等に所属。
セルフプロジェクト "spin notes" にて公演を行う。聴衆に目を閉じるよう促し、"音楽そのもの" を感受する時空間の現出をテーマとしている。spin notesのYouTubeでは「響きを見る」をコンセプトに、敢えて白い画面で即興演奏をアップしている。

篠笛　望月 輝美輔

邦楽囃子笛方
11 歳より笛を望月美沙輔に師事。一般社団法人長唄協会会員。
青山財団奨学生、市川市文化振興財団新人演奏家コンクールにて優秀賞を受賞、皇居内桃華楽堂に於いて、御前演奏の栄誉を賜る。
東京藝術大学音楽学部邦楽科に在学中、浄観賞・安宅賞・アカンサス音楽賞を受賞。
主な演奏に、新作歌舞伎「風の谷のナウシカ」「ファイナルファンタジーX」、大人計画舞台「ゴーゴーボーイズ・ゴーゴーヘブン」「人間御破算」、藤井風「まつり」
大原櫻子「花光る」を作曲・演奏。

当たり鉦　安倍 真結

東京都出身。幼少より囃子を母、二代目望月太左衛に師事。
東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。博士号(音楽)取得。
安宅賞、アカンサス音楽賞、同声会新人賞を受賞。
皇居内桃華楽堂に於いて、御前演奏の栄誉を賜る。
三味線音楽・箏曲などの演奏会、日本舞踊公演等での古典演奏活動を中心に、海外公演や、オーケストラをはじめ様々なジャンルのアーティストとの共演、ドラマ・演劇・映画への出演、CM・アニメ・ゲーム音楽等の収録参加、所作指導など、多岐にわたり活動している。

和太鼓　渡辺 隆寛

プロ和太鼓奏者。和太鼓のみならず、ドラム、篠笛、チャッパ、ダンス、DTM作曲など幅広いジャンルに精通し、力強いパフォーマンスと卓越したリズム感で国内外で活躍する次世代のエース。現在、津軽三味線奏者・椿正範氏に師事し、民謡と鳴り物を習得中。

＜主な活動＞ラグビーワールドカップ 2019 選手入場演奏、映画「帝一の國」指導・出演、その他アニメや映画の劇伴収録、振付・作曲など多岐にわたる活動。
＜コラボ歴＞つんく♂、モーニング娘。、MAN WITH A MISSION、高橋洋子、ウマ娘など

ボイストレーナー
上杉 清仁

高知県出身。千葉県松戸市在住。高知大学人文学部卒業。同大学院教育学研究科修了。東京藝術大学大学院修士課程、博士後期課程を修了し博士号(音楽)を取得。スイス政府奨学金を得てスイス・バーゼル音楽大学・スコラカントルムに留学し、ゲルト・テュルク、アンドレアス・ショル両氏のもとで研鑽を積む。しなやかで柔らかい美声と的確な解釈による多彩な表現には定評があり、日本を代表する実力派カウンターテナー歌手として活躍している。また、発声解剖学にも造詣が深く、日本全国で発声に関する様々な悩みを解消しており、発声指導者としても不動の信頼を得ている。これまでに声楽を小原浄二、野々下由香里、 伊原直子、 故戸田敏子、 ペーター・コーイ、ロビン・ブレイズ、パスカル・ ベルタン、故クラウス・オッカーの各氏に師事。声楽アンサンブル『ラ・フォンテヴェルデ』メンバー。カクウチ・デ・ムジカ音楽監督、楽奏団あ・うん指揮者。日本声楽発声学会理事、日本音声言語医学会員。昭和音楽大学講師。

合同演奏　室内合唱団 VOX GAUDIOSA

1997年活動開始。団名はラテン語で「喜びの声」(VOX=声、GAUDIOSA=喜び)の意。ルネサンスから近現代に至る国内外の合唱音楽を通じて、純正調のハーモニーと豊かな音楽性による表現を追求している。年1回の定期演奏会開催のほか、合唱祭・各種イベントへの参加、CD録音、新作の委嘱初演、海外演奏旅行、国内外の合唱団とのジョイント公演など、活動を多角的に展開。毎週末、関東一円から団員が集まり、練習を重ねている。2011年、グイード・ダレッツォ国際合唱コンクール(イタリア)にてグランプリ受賞、翌2012年スロヴェニア・マリボルにて開催のヨーロピアン・グランプリ(European Grand Prix For Choral Singing 2012)にファイナリスト団体として出場。東京都合唱連盟一般理事団体。

Members

Soprano	Alto	Tenor	Bass
浅見 佳奈子	飯塚 麻里子	Jens Kristian Stoltze Haugset	大桃 由紀雄
菊地 真生子	大迫 瑞季	片岡 睦裕	下村 雄介
田島 萌々夏	岡田 諒子	船木 柳次郎	Rudolf Jason
寺西 こと音	岡本 友	松本 翔	杉村 信
中村 真悠子	梶山 絵美	矢野 塁	Billy Wong
	浜田 瑞葵		渡辺 歩

Gaia Philharmonic Choir
ガイア フィルハーモニック クワイア

“Gaia”とは、ギリシア神話の大地の女神の名前。悠久の大地のように揺るぎない音楽を奏で、ともに歌いあうことで平和を祈りたいという思いから名づけられた。国内外の合唱団との交流に力を入れており、シンガポール、フィリピンの合唱団とのジョイントコンサート『THREE』を2006年から10年にわたって6回開催、交流を深めた。また、北海道の合唱団とのジョイントコンサート『Four Leaves Concert』を2016年より3回開催した。2001年及び2002年、全日本合唱コンクール全国大会にて金賞受賞。2014年、国際合唱コンクールMundus Cantatに出場し、総合グランプリを受賞。2023年7月、京都アルティ声楽アンサンブルフェスティバル2023に招待合唱団として出演。

Members

Soprano
飯室 遥香
蟹江 春香
鈴木 晴
関口 順子
大安 香澄
塚原 美奈子
永塚 由季
森 美和子

Alto
相田 歩
池田 理帆
沖田 知恵美
阪口 加奈恵
谷 夏七星
徳永 ひかる
野元 一葉
山本 真記子
油原 真智子

Tenor
木崎 誠史
坂井 聡大
榊原 暁仁
冨澤 佳央
根本 健一
山中 拓哉

Bass
須藤 圭祐
中村 俊幸
深谷 章史
吉本 宗一郎

団員募集中

■こんなあなたに！
- 松下 耕の指揮で歌ってみたい
- 大学卒業後の合唱団を探している
- 久々に合唱を再開したい
- プロの声楽家から発声を学びたい
- 国内外に演奏旅行したい
- 混声合唱の様々な名曲に触れたい

Instagram　X(旧Twitter)　Facebook

■練習について
練習日　毎週日曜日13-17時
会場　東京都内公共施設
団費/月　一般3,500円　学生1,500円

■見学問合せ先
Mail: gaiaphilharmonicchoir@gmail.com
HP：http://gaia2001.com/
Instagram：@gaiaphilharmonicchoir
X(旧Twitter)：@GaiaChoir
Facebook：fb.com/GaiaChoir

Special Thanks

舞台監督	安藤 嘉規
受付チーフ	加藤 優
写真撮影	長谷川 恭子
チラシ・パンフレットデザイン	池田 理帆
ビデオ撮影	中部クリエイティブ

JASRAC 出 2407747-401